

学生委員のこと

式 正 英

赴任して間もない頃、教授会の折、たまたま隣りに坐っておられた英文学のT先生が、「私が転任してきたときには、待っていましたとばかり、学生委員に選任されてしまった。ひどいことをするなと思ったが、もはや後の祭り、とも角イキリたった女子学生というのは手がつけられません。いくら説得してみても、感情的で聞きいれないことがありますからね。あなたも早速学生委員に選挙されるかも知れませんよ」とおっしゃったことがある。それ以来、教育意識という点では、いかにも曖昧な態度でこの大学にやって来た私にとっては、女子学生諸君が明眸の蔭に剣を含んでいる様な、恐ろしい存在に感ぜられたした次第で、学生委員の改選のある度に、我が名が投票用紙に記されざることを念じながら、ひそやかに教授会の床席を汚していた。ところがそれから二年半ほど経った昨秋、たまたま欠席していた教授会の折に学生委員に選出されてしまった。教育熱心な諸先生達でも、学生委員を敬遠される所以は、関連する事件さえあれば「深夜、早朝を問わずに招集されて、とても研究活動など、落ち着いてやっている訳にはいかないことにある。大学が一面教育の場であるとは云え、多量の時間を脅かされるに至っては、やりきれないのは尤もなことである。

幸いなことに、この半歳の間は、例の安原斗争の時の様な緊迫激昂した世情の動きはなく、お蔭で今の所は、平凡に勤めを果させていたゞいている。静謐な時にめぐりあたって何よりではあるが、それでも学生委員会は学内の他の諸委員会に比べれば、開催の頻度は遙かに多く、月に三度位は覚悟せねばならない様である。初めのうちは、ミンセイドウだ、ゼンジレンだ、マルガクドウだ、ゼンキョウゼミだ、ジヨウセンがアマイなどのテクニカル・チームが続々と飛び出して、大いに戸惑いもしたが、最近になってやっと全学連を含む学生運動組織の複雑な系図も、何とかわかる様になった。ミンセイドウは日本民主青年同盟、ゼンジレンは全国学生自治会連絡会議、マルガクはマルクス主義学生同盟、ゼンキョウゼミは全国教育系学生ゼミナールであり、ジヨウセンは情報宣伝活動のことと云った具合に、予め知っておかねばならぬ略語義解が必要なほどである。

学生委員会は学生自治会と教授会の間をとりもつ連絡機能を持ち、すべからず学生大衆の意見を吸んで、これを教授会に伝える使命がある。だから学

生委員会と自治委員会のいずれか一方が必要と認めた際には、両者の協議会が持たれることになっている。しかし、実際には各クラスの自治委員によって構成されている自治委員会とではなく、全学生の投票によって信任された執行委員会との会合が行われている。この点始めから規則が無視されているのも学園内という暢気な場所柄だからであろうし、学生間の自治意識は執行委員会に結集し、いわば自治業務が分業化されてしまったものであろうと思われる。お蔭で元気のいい自治会執行委員諸君の紅潮した頬や射る様な眼ざしに接する機会も一度や二度ではなくなった。

かつてのT先生の御忠告で始めはこわい感じも受けたが、頭のいいフアイトの漲る諸君と話をすることが、この頃では愉快に感ずるほどの心の予備もできた。この協議会では全くたつぱり時間をとられることが多い。四時間も五時間もかけてぶっ続けでネバられるのだから、根くらべの様なものである。その間、一つの話題をめぐって議論がクルクルとめぐっている。例えば、臨時学生大会の開催について、学生部長の承認が必要であり、学生部長は独断を避けて学生委員会に諮り、学生委員会は執行委員会と協議して問題点を調整する。このようなときいつも問題になるのは開催期日と時間である。自治活動のために予めあけてある水曜日の午後は、おかしなことに学生大会のあるというときに限って、校内唯一の全学生収容能力のある講堂が他の行事に予約済みとなっていて、期日変更を要求される仕儀となる。期日が変れば得てして講義時間に喰いこまざるを得ない。講義時間を変更したり、縮めたりすることが個々の先生にとっては比較的容易でも、全学歩調を揃えらるとなると大問題で、教授会の決裁を得ねばならない。さうなると学生大会開催の緊急性を説く必要が生じて、自由であるべき学生大会の議題を教授会の議にのぼせることになる。その結果は言論の束縛だの、自治活動の制約だのと云う悪評が生まれる事態が生じないとは限らない。学生の自治活動を自分達で大事にしてゆく気持があるならば、何故波風のたゆ様に講義時間と抵触しない様な期日や時間を選べないものかと思う。講義をやめてまで大会を開くという行動によって、心理的緊迫感を盛りあげようとするのなら、技術的に過ぎるし、講義時間変更の交渉に若者特有の冒険のはげ口をもとめているのなら、学生委員会や教授会は何とサカナにされている様なものである。講義時間とふりかえなければ学生大会が成立しないというのであれば、お茶大生の自治意識は地に落ちたとも云えるだろう。どの辺に原因があるかは判らないが、今の感想が杞憂であることが立証される様なことが、あと半期の任期のうちに起ればがなと願っている。(1962.3.28)